11～12世紀シリア地方社会の裁判官

——トリポリとジャバラの場合——

Qāḍīs in the Syrian Coastal Towns of Tripoli and
Jabala during the 11th–12th Centuries佐藤 次高^{*}
SATO Tsugitaka

ABSTRACT Some Coastal towns of Syria during the 11th–12th centuries were headed by local *qāḍīs* (judges) who had acquired independence from either Fatimid, Seljuqid, or Byzantine rule. These urban states have been the objects of serious research by such scholars as Cl. Cahen, E. Ashtor, A. Havemann and U. A. Tadmuri. But as for the period when *qāḍīs* lost their independence, few references are made to their role in Muslim urban life. The cases of Tripoli and Jabala, because of ample information, may provide us with a means to better our understanding of local *qāḍīs* in medieval Islamic societies.

During the years 1066–1070 the *qāḍī* office of Tripoli was established by Amin al-Dawla, a Shi'ite jurist of great reputation, from the 'Ammār family. Jabala also had a wise *qāḍī* named Manṣūr, who managed the judicial affairs among Muslims under Byzantine rule. His status (*Ra'īs Jabala*) was inherited by his son, Ibn Ṣulayḥa, who maintained independence against the pressure of the Seljuqids until the arrival of the Crusaders. Ibn Ṣulayḥa, faced with a strong siege by the Crusaders, was forced to transfer sovereignty to Tripoli; but another *qāḍī*, Ibn al-Naqqār, then continued to manage judicial affairs in Jabala. Even under the Crusader rule from July 1109, Jabala was administered by an influential *qāḍī* named Manṣūr b. Nabil, who succeeded afterwards in delivering the town to Saladin.

These instances reveal that the *qāḍīs* of Tripoli and Jabala managed

* 東京大学文学部教授

Professor, Faculty of Letters, University of Tokyo

these municipalities even during the periods when towns lost their independence. We may therefore evaluate positively the role of local *qādīs* before the Ottoman period, a time when they came to be organized more systematically into that empire's provincial administration.

はじめに

イスラム社会の裁判官 (*qāḍī*) の役割について、マーワルディー (1058年没) は、紛争の調停、禁治産者の後見、ワクフの管理、遺言の執行、公共の利益の監督、公平な裁判などをあげている。⁽¹⁾ E. ティヤンは、このような法学者の見解をふまえてイスラムの司法制度史をはじめて総合的に研究し、アイユーブ朝やマムルーク朝時代のカーディーは、裁判業務のほかスルタンの秘書や国庫の管理などを担当することによって、行政にも参画するようになったと述べている。⁽²⁾ これは主として中央レベルでの行政的機能を論じたものであるが、カーディーの社会的役割をさらに具体的に理解するためには、地方社会のなかのカーディーにも注目する必要がある。

シリアの地方社会については、Cl. カーエンの先駆的な研究以来、⁽³⁾ 町の長 (*ra'īs al-balad*) やカーディーによる自治政権の性格をめぐるさまざまな研究が発表されてきた。E. アシュトールは、12世紀シリアの行政問題をライスを中心にして論じ、ダマスクス、アレppo、ジャバラ、アスカラン、ジュバイル、ハッラーンなどの事例を広い視点から比較検討した。⁽⁴⁾ また、A. ハーヴェマンのライスとカーディー研究は、10-12世紀のシリア諸都市を対象にして、自治政権とリーダーシップの分析をさらに具体的な形でおし進めたものといえよう。⁽⁵⁾ 一方、これと同時代のトリポリの歴史を総合的に叙述したU.A. タドムリーの著書は、徹底した史料調査とていねいな論証にもとづく地方都市の事例研究として注目に値する。⁽⁶⁾

しかしこれらの研究は、いずれも考察の範囲を地方の有力者が自治政権を樹立した時期に限っており、シリアの諸都市がビザンツや十字軍などの外国勢力の支配下におかれた時期についてはほとんど触れるところがない。また自治政権の時代についても、史料の検索が不十分であるために、基本史料によって年代や事実を修正しなければならない点がいくつも認められる。そこで本稿では、

シリア海岸都市のトリポリとジャバラをとりあげ、両都市におけるカーディーの役割をできるだけ具体的に検討してみることにしたい。特にトリポリとジャバラを選んだのは、11-12世紀についてはカーディーにかんする史料が比較的豊富であり、しかもおよそ120キロメートルを隔てた両都市は、セルジューク朝のシリア進出や十字軍の侵攻など大きな歴史変動のなかで、不思議なほどに太い絆を保ち続けたからである。

なお本稿は、現地調査にもとづくジャバラ3部作の第2部に当たるが、基本的なねらいは前稿と同じく、地方社会の視点からイスラム史の全体を見直すことにある。⁽⁷⁾ 地方の都市社会のなかでカーディーはいったいどのような役割を果たしていたのか、この点について同時代史料をもとに新しい提言を試みることにしたい。

I. トリポリのカーディー

11世紀のはじめのシリアでは、カイロのファーティマ朝、ダマスクスのセルジューク朝、それにビザンツ帝国の三大勢力が、海岸都市の支配権をめぐる互いに抗争をくり返していた。ヒジュラ暦455（西暦1063）年、ファーティマ朝の支配下にあったスール *Ṣūr* (Tyre) のカーディー、イブン・アビー・アキール *'Ayn al-Dawla b. Abi 'Aqil* は、カリフ・ムスタンスィル（在位1036—94）への服従を拒否してファーティマ朝から独立し、465（1075）年に没するまでスールの自治的な統治を続けた。⁽⁸⁾ イブン・アビー・アキールは商船を持って商売を営む資産家でもあったが、没後、スールのカーディー政権はその子供たちによって継承され、482（1089）年にファーティマ朝がスールとサイダーを奪還するまで約27年間にわたって存続した。⁽⁹⁾

この間に北方のトリポリ *Ṭarābulus* (Tripoli) でも、アンマール *'Ammār* 家のアミン・アッダウラ *Amin al-Dawla Abū Ṭalib al-Ḥasan b. 'Ammār* によるカーディーの自治政権が樹立された。従来の研究は、アミン・アッダウラが自立した年を、ファーティマ朝の総督ムフタール・アッダウラが没した462（1070）年とすることで一致している。⁽¹⁰⁾ その根拠は *Mir'āt* や *Kāmil* の記事にあるが、それらはいずれも「462年には、アミン・アッダウラはすでにトリポリの支配者」であり、「その領主 (*Ṣāḥib Ṭarābulus*) として町を統治し、命令を下し、自由に振舞った」ことを示すだけである。⁽¹¹⁾ これ

について正確な年代を定めるのはむずかしいが、Sibt Ibn al-Jawzī (1256年没) は、459 (1066-7) 年の出来事として次のような記録を残している。アレップのミルダース朝君主マフムードが、ファーティマ朝と結んだ兄弟のアティヤーと「戦い以外にない」状態に陥ったとき、トリポリのカーディー・イブン・アンマル (アミーン・アッダウラ⁽¹²⁾) は、「両者の間に入り、(和解の) 金額を定めて事態を收拾した」。この記事はアミーン・アッダウラがすでにかなりの政治力を保持していたことを示しているが、ここにはまだ彼がトリポリの支配者 (ṣāhibあるいは ra'is) であることは明記されていない。したがってアミーン・アッダウラがトリポリの支配権を手中にしたのは、ヒジュラ暦459-462年の間のことであったと推測される。

アンマル家の前身は、ファーティマ朝の創設期に軍団の主力を形成したベルベル人のクターマ Kutāma 族にあった。一族のアブー・ムハンマド Abū Muḥammad al-Ḥasan b. 'Ammār (390/1000年没) はカリフ・ハーキム (在位996-1021) の宰相 (wazīr) に就任すると、同族のアブー・タミーム Abū Tamīm Sulaymān をダマスクスに派遣した。アブー・タミームはまもなく総督 (wālī) となってトリポリに赴任し、後にアンマル家がエジプトで権勢を失ってからもトリポリの名家として生き残る道を開いたのである。このアンマル家のなかで最初にカーディーの職を獲得し、トリポリに自治政権を樹立したのがアミーン・アッダウラであった。Ibn Shaddād (1285年没) は、このカーディーの事績を次のように記している。

イブン・アンマル (アミーン・アッダウラ) はシーア派の法学者 (faqīh) であり、人々に抜きん出た聡明さと優れた見識の持ち主であった。彼はトリポリに「知恵の館」Dār al-'Ilm を建設したが、そこには10万冊以上の書物が収められていた。また彼は、Jirāb al-Dawla の『魂の蘇生』*Tarwīḥ al-Arwāḥ* と題する書物の編纂を行った (ṣannafa⁽¹⁴⁾)。

これによれば、アミーン・アッダウラはシーア派のカーディーであり、彼はカリフ・ハーキムがカイロに建設した「知恵の館」Dār al-Ḥikma あるいは Dār al-'Ilm と同名の研究機関を建設したことになる。それでは、ここでの書物の編纂とはどういう意味であろうか。タドムリーは、アミーン・アッダウラがジラーブ・アッダウラと同名の書を著したのであろうと推測しているが⁽¹⁵⁾、私は *Tarwīḥ* の写本を確定し、これに注釈をつけるなど文字通りの編纂作業を

指すものと思う。

464年ラジャブ月（1072年3-4月）にアミン・アッダウラが没すると、息子のシャムス・アルムルク Shams al-Mulk Muḥammad がまだ幼かったために、アミン・アッダウラの兄弟アブー・アルカタীব Abū al-Katā'ib Aḥmad と甥のジャーラル・アルムルク Jalāl al-Mulk Abū al-Ḥasan 'Alī との間に後継者争いが発生した。ジャーラル・アルムルクは、アミール・イブン・ムンキズ Sadīd al-Mulk Ibn Munqidh の助力を得てアブー・アルカタীবをトリポリから追放し、叔父の地位を継承することに成功した。彼は⁽¹⁶⁾492年シャバーン月末（1099年7月半ば）に没するまで、30年近くにわたり、トリポリのカーディーとしてこの町の統治を続けた。Ibn al-Athīr（1233年没）によれば、「彼は町の秩序を見事に維持し、叔父の死による影響が現われることはなかった」といわれる。⁽¹⁷⁾その政権維持の方針は、「（エジプトの宰相）アミール・アルジュユーシュに服することなく、（ダマスクスの）トルコ人 al-Atrak に贈物をし、彼らと友好関係を保った」と伝えられるように、自らは⁽¹⁸⁾シーア派であっても、スンナ派のセルジューク勢力と結び、それによってエジプトのファーティマ朝を牽制することにあつた。

ジャーラル・アルムルクが政権を握ってから10年後の473（1080-1）年、アンティオキアとジャバラのビザンツ総督フィラレトス Philaretos Brachamios がジャバラのカーディーを逮捕する事件が発生した。⁽¹⁹⁾これを知ったジャーラル・アルムルクは、フィラレトスに使いを送り、ジャバラのカーディーの釈放とカーディー職への復帰を実現させた。この見返りにジャーラル・アルムルクがジャバラの明け渡しを求めると、ジャバラのカーディーはこれに応じて海上からの派兵を求めたという。この間の状況を Sibṭ Ibn al-Jawzi は次のように述べる。

イブン・アンマール（ジャーラル・アルムルク）は、'Ayn al-Zamān のラカブをもつ奴隷 (ghulām) にトリポリ軍を構成していた300のトルクマーンと水兵 (al-Baḥrāniya) の一団をつけてジャバラへ派遣した。夜、援軍が到着すると、カーディーは睡眠中の見張りを欺いて水兵に門を開き、彼らを市内に導き入れた。彼らは〔アッバース朝のカリフ〕al-Muqtadī と〔セルジューク朝のスルタン〕Malik Shāh のためにフトバを行つた。⁽²⁰⁾

この記事によれば、トリポリのカーディーは、小規模ではあるが、トルコマ

ーンなどからなる騎馬軍と水軍とを保持していたことになる。ただこのトリポリ軍 (Jund Ṭarābulus) は、町の若者を中心にして編成されたダマスクスやアレppoのアフダース(aḥdāth)⁽²¹⁾とは異なり、カーディーの所有する軍隊 (jund) であった点が特徴であろう。いずれにせよ、この征服を機にジャバラはおよそ115年ぶりにビザンツの支配を脱し、トリポリの支配下に組み込まれることになった。それでは、ここに登場したジャバラのカーディーとは、いったいどのような人物だったのであろうか。次に同じシリアの海岸都市ジャバラについて検討してみることにしたい。

II. ジャバラのカーディー

アラブ軍による征服 (17/638年) 以来ムスリム政権の支配下にあったジャバラ Jabala は、357 (968) 年、シリアに侵入したニケフォロス 2 世の攻撃によりビザンツの支配に服することになった。⁽²²⁾ビザンツ時代のジャバラのカーディーについて、Ibn al-Athir は

Ibn Ṣulayḥa の父 Maṣṣūr は、ビザンツがムスリムを支配していた時代に、町の長 (Ra'īs Jabala) としてムスリム間に生ずる紛争の裁決に当たっていた。ビザンツの力が弱まり、ムスリムが支配権を得て、ジャバラが Ṣaḥīb Ṭarābulus であるジャラル・アルムルクの支配下に入っ
た後にも、Maṣṣūr は慣行 ('āda) にしたがって町の統治を続けた。⁽²³⁾

と述べている。ここには、ビザンツの支配時代からカーディー・マンスールが「町の長」としてムスリムの紛争の裁決に当たっていたこと、およびトリポリの支配下に入ってから、いぜんとして町の統治者としての権限を行使し続けたことが明瞭に示されている。

しかもマンスール (没年不明) の死後、父を継いでジャバラのカーディーとなったイブン・スライハ Ibn Ṣulayḥa Abū Muḥammad 'Ubayd Allāh b. Maṣṣūr は、軍事 (jundiya) を好み、⁽²⁴⁾軍隊 (jund) を徴募して、その知勇 (shahāma) が広く知られるようになった。⁽²⁵⁾イブン・スライハの勢力拡張を恐れたトリポリのジャラル・アルムルクは彼を捕らえようとしたが、Ibn al-Athir によれば、

イブン・スライハはジャラル・アルムルクの意図を知ると、彼に反旗を翻してアッバース朝カリフのフトバを掲げた。そこでジャラル・アルム

ルクは「ダマスクスのセルジューク朝君主」Duqāq b. Tutush に金を贈り、イブン・スライハの包囲を求めた。Duqāq はこれを実行したが、しかし何の勝利も得ることはできなかつた。⁽²⁶⁾

という。つまりイブン・スライハは、公的にはアッバース朝カリフの宗主権を認め、現実には自らの軍勢力によってジャバラの独立を達成したのである。独立の正確な年代は不明であるが、⁽²⁷⁾イブン・スライハはトリポリやセルジューク朝の圧力に抗して、492 (1099) 年はじめに十字軍 (al-Firanj) がジャバラを包囲した時にも、まだ独立を維持していた。⁽²⁸⁾なお、トリポリのカーディー・ジャラル・アルムルクが没し、兄弟のファフル・アルムルク Fakhr al-Mulk Abū 'Alī 'Ammār b. Muḥammad が後を継いだのは、この包囲からしばらくたった492年シャールバーン月 (1099年7月) のことであった。⁽²⁹⁾

ジャバラのイブン・スライハは、十字軍による第1回目の包囲の時には、セルジューク軍が接近しつつあるとの虚報を流すことによって、異教徒の軍を撤退させることができた。⁽³⁰⁾しかし Godfrey と Robert の二人は再三にわたってジャバラの奪取を試み、イブン・スライハも配下の者 (aṣḥāb) を率いて奮戦したが、手持ちの兵力ではとうてい支えきれないことを知った。そこでイブン・スライハは、494年シャールバーン月 (1101年6月)、ダマスクスのアミール・アターベク Ṣāḥir al-Dīn Atābek に使いを送り、ジャバラの統治権をセルジューク朝に譲り渡すことを提案した。⁽³¹⁾その後の動きを Ibn al-Qalānisi (1160年没) は次のように述べる。

アターベクはイブン・スライハの要求に応え、望みをかなえるために、息子の Amīr Ṭāḥ al-Mulūk Būrī を前述の海岸都市に派遣することを約束した。君主の Shams al-Mulūk Duqāq はディヤール・バクルにいてダマスクスには不在であり、シャッワール月はじめに戻った時には、事はイブン・スライハの望み通りに運んでいた。⁽³²⁾Ṭāḥ al-Mulūk は部下を率いてジャバラに向い、町の明け渡しが行われた。

こうして494年シャッワール月 (1101年8月)、カーディー・イブン・スライハはブーリーにジャバラを明け渡して町を離脱し、自ら独立を放棄したジャバラは新たにセルジューク朝の支配下におかれることになった。⁽³³⁾しかしブーリーの統治はジャバラの人々には不評判であった。彼は住民に対して不正を働き、⁽³⁴⁾「公正 ('adl) と正義 (iṣṣāf) の慣行に外れた」政治を行つたと伝えられる。

住民の不満は高まり、ついに彼らはトリポリのカーディー・ファフル・アルムルクにジャバラを任せるに足る人物の派遣を求めた。同じ494年の記録として *Kāmil* には、

彼（ファフル・アルムルク）は、この要求に応じて軍隊（‘askar）を派遣した。彼らはジャバラに入ると、住民と合流し、Taj al-Mulūk (Būri) およびその部下と戦いを交えた。結局、トルコ人は敗走し、ファフル・アルムルクの軍隊がジャバラを支配下に収めた。彼らは Taj al-Mulūk を捕虜にすると、彼をトリポリへと護送した。ファフル・アルムルクはこの捕虜を丁重に扱い、⁽³⁵⁾ ダマスクスにいる父のもとへ送り届けた。

と記されている。これによれば、セルジューク朝のジャバラ支配は短期間のうちに終わり、ジャバラは再びトリポリの支配下に組み込まれることになった。そしてこの体制下でのジャバラの実質的な統治の担い手を探してみると、またもやカーディーの名が浮かび上がってくる。トリポリで学問を修めたカーディー・イブン・アッナッカル Ibn al-Naqqār al-Jubayri (533/1139年没) は、ファフル・アルムルクがトリポリを脱出する501（1108）年後までジャバラに留まり、「フトバとサラートとワクフの事をとりしきった」という。⁽³⁶⁾

しかし十字軍の包囲によって、トリポリとジャバラの情勢はしだいに緊迫の度を加えつつあった。498（1105）年、トゥールーズ伯のレイモンはトリポリの包囲中に没したが、レイモンとファフル・アルムルクの間には、「トリポリ郊外はレイモンの領有に帰すが、しかし交通は妨げない」との協約（hudna）⁽³⁷⁾ が結ばれていた。この協約の相手の死によって、トリポリの状況はさらに厳しさを増すことになったのである。十字軍によるトリポリ包囲が強化されると、501年シャールバン月（1109年3-4月）、ファフル・アルムルクは500の騎兵と歩兵を率いてバグダードに向い、スルタン・ムハンマドに援軍の派遣を要請した。この交渉は順調に運んだものの、留守中の代理としてトリポリに残っていた甥のシャムス・アルムルク Shams al-Mulk Abū al-Manāqib が、⁽³⁸⁾ 彼に反旗を翻してエジプトのファーティマ朝側につく事態が発生した。シャムス・アルムルクはまもなくファフル・アルムルクの手の者（aṣḥāb）に捕えられたが、バグダードから戻ったファフル・アルムルクは、トリポリ住民の動向を把握することができず、⁽³⁹⁾ やむなく軍を率いて北方のジャバラの町に入ったと伝えられる。

一方、ファーティマ朝の宰相アフダルは、トリポリ住民の要求に応じて大規模な艦隊 (uṣṭūl) を派遣したが、その到着は遅れ、502年ズー・アルヒッジャ月11日 (1109年7月13日)、トリポリは十字軍の前に陥落した。これに伴って殺害を免れた男は捕虜とされ、「知恵の館」に所蔵されていた文書も略奪の対象とされた。⁽⁴⁰⁾ トリポリを落とした十字軍は、次いでジャバラを包囲し、同年ズー・アルヒッジャ月22日 (1109年7月23日)、ファフル・アルムルクは安全保証 (amān) をえて十字軍に町を明け渡した。ジャバラを脱出したファフル・アルムルクは、シャイザルを経由してダマスクスの君主トグテキーンの下に身を寄せ、バラダー川の水源地帯にあるザバダーニー al-Zabadānī とその周辺をイクター (iqṭā')⁽⁴¹⁾ として授与された。こうして、およそ半世紀近くにわたって存続したトリポリとジャバラのカーディー政権は、軍事的な外圧を受けてあっけなく崩壊したのである。

III. サラディンによるジャバラの解放

トリポリが武力で征服され、ジャバラが安全保証 (アマーン) を条件に明け渡されたように、十字軍によるシリア諸都市の征服にはさまざまな形態があった。したがって征服後もいぜんとしてムスリムが多数を占める都市もあれば、ムスリムの人口比が著しく低下した都市も少数ではあるが存在した。⁽⁴²⁾ しかしJ. ブローワーが述べるように、確かに征服からほぼ10年間は多くの都市や城砦からムスリムが姿を消したものの、秩序が回復され、経済が復興するにつれてムスリムは元の都市や村に戻りはじめた。その結果、トリポリ、ジャバラ、ラタキアなどでは、やがてムスリムが従来通りの多数派を形成するようになったのである。⁽⁴³⁾

それでは十字軍支配下のこれらの都市では、ムスリムの統治はどのように行われていたのであろうか。この問題についてほとんどのアラビア語史料は沈黙を守っているが、*Kāmil* には次のような興味深い記録が残されている。

[584 (1188) 年、エルサレムを解放した] サラディン Ṣalāḥ al-Dīn が騎士の城 (Ḥiṣn al-Akrād) の下に布陣したとき、ジャバラのカーディー Maṣṣūr b. Nabil が彼の下に来て町の明け渡しを提案した。このカーディーは、アンティオキアとジャバラの君主 Bohemond の下にあって、その言葉には信頼がおかれ、十分な尊敬と高い地位が与えられていた。彼は

Bohemond との信頼関係にもとづいて、ジャバラとその周辺地域に住む全ムスリムの統治に当たっていた。⁽⁴⁴⁾

このマンスール・ブン・ナビールについては、他に史料がなく、詳しい経歴は不明である。しかしまず何よりも、マンスールがカーディーとして人々の尊敬を集め、ボヘモンド3世との信頼関係にもとづいて、ジャバラとその周辺農村に住むムスリムの統治に当たっていた点に注目すべきであると思う。一般に十字軍支配下の地域社会では、ムスリムの統治はカーディーに委ね、ユダヤ教徒の統治はラビに委ねるのが慣行であったから、マンスールのようなカーディーはジャバラ以外の都市にもいたとみてよいであろう。⁽⁴⁵⁾

十字軍の支配下にあって、マンスールはやがてジャバラやラタキアの解放を自らの義務と考えるようになり、サラディンに対して「ジャバラのムスリムにはすでに明け渡しの心づもりができております」と述べて、町の解放を促した。⁽⁴⁶⁾これに応じてサラディンは、タルトゥースからマルカブを経由して、584年ジュマダー1月18日(1188年7月16日)にジャバラへ到着した。これより先に町へ戻ったマンスールは、住民にムスリム軍の到着を知らせ、城壁に旗(a'lām)を掲げて引渡しの意を公に表明した。⁽⁴⁷⁾十字軍騎士は港に面した城砦(hiṣn)―現在のローマ劇場跡―にたてこもったが、この遠征に参加した 'Imād al-Dīn al-Iṣfahānī (1201年没)によれば、

ジャバラのカーディー(Qaḍī Jabala)は彼らのために仲介役をつとめ、人質(raha'in)の引渡し後に、つまりアンティオキアに拘留していたジャバラの住民を返還して事態を収拾し、武器、馬、財宝、穀物を引き渡す条件で、安全保証を得るものと定めた。⁽⁴⁸⁾

のである。十字軍騎士はカーディー・マンスールの仲介を受け入れ、翌日には城砦の明け渡しが行われたために、無血のうちにジャバラの解放が実現した。⁽⁴⁹⁾続いてサラディンはラタキアに向い、ただちに町の包囲を開始したが、市街地(madina)を撤収して二つの城砦にたてこもった十字軍との間に激しい戦いが行われた。しかし形成が不利となった十字軍側はジャバラのカーディーに仲介を要請し、安全保証(amān)の条件を定めることを求めた。マンスールはこれにもとづいて食糧、武器、家畜の引渡しを条件に、十字軍側の騎士、女性、子供の生命を保証することで合意を取り付け、ジュマダー1月27日(7月25日)に解放が完了すると、二つの城砦にはイスラムの旗が掲げられた。⁽⁵⁰⁾

先にジャバラを解放したサラディンは、町の防衛のためにシャイザルの領主、アミール・サービク・アッディーン *Sābiq al-Dīn 'Uthmān b. al-Dāya* を配し、ラタキアには甥のタキー・アッディーン *Taqī al-Dīn 'Umar* を任じて、町の復興と城の再建に当た⁽⁵¹⁾らせた。また、ジャバラとラタキアの解放に当たってマンスールが果たした功績をたたえ、「私有地 (milk) を彼のワクフに定めると共に、先祖伝来の私有地の管理を認め、引続きカーディーの地位を保証した⁽⁵²⁾」と伝えられる。

む す び

11世紀半ば頃から12世紀はじめにかけて、スール、トリポリ、ジャバラなどのシリアの海岸都市では、ファーティマ朝、ビザンツ帝国、セルジューク朝の三大勢力の間隙をぬって、カーディーによる自治政権が樹立された。彼らは、町の名士として豊かな資産を所有し、騎兵や歩兵、あるいは水軍からなる武力を背景に、本来の裁判業務ばかりでなく、社会生活の全般をとりしきる政治的な秩序維持の任にも当たった。

しかし町の秩序維持を担うカーディーの役割は、自治政権が樹立された時期だけに限られていたのではない。これまで検討してきたように、トリポリのアミン・アッダウラは、自立以前からミルダース朝の権力争いを調停する力を持っていたし、ジャバラでもイブン・スライハの父マンスールは、ビザンツ支配下にあつてすでに「ジャバラの長」と称され、早くからムスリムたちの統治に当たっていた。またイブン・スライハの逃亡後、トリポリの支配下に入ったジャバラでは、カーディー・イブン・アッナッカルがフトバ、サラート、ワクフの事を担当したし、さらに十字軍時代のマンスール・ブン・ナビルは、ボヘモンド3世からジャバラとその周辺地域の統治を委ねられていた。

一般にカーディーは、オスマン朝時代になると地方行政の重要な担い手として体制内に組み込まれたとされるが、それ以前の時代については行政への参画の仕方は相対的に低く評価されてきた⁽⁵³⁾。しかしトリポリやジャバラの例から明らかなように、小都市を中心とする地方社会では、自治政権の時代以外にも、カーディーは町の秩序維持を含む行政の分野で重要な役割を演じていた。カーディーによる自治政権は、周囲の政治状況に応じて偶然に生まれたのではなく、このような日常の役割を基礎にしてはじめて樹立されたものとみるべきであらう

う。アイユーブ朝やマムルーク朝時代の事例研究はまだ十分ではないが、地方社会のあり方をきめ細かく理解するためには、オスマン朝以前の時代についても、カーディーの役割をもっと積極的に評価することが必要であると思う。

注

- (1) *Māwardī*, 70-71.
- (2) E. Tyan, *Histoire de l'organisation judiciaire en pays d'Islam*, Leiden, 1960, pp. 424-429.
- (3) Cl. Cahen, *La Syrie du nord à l'époque des Croisades*, Paris, 1940, pp. 194-195, 233-234, 461-462.
- (4) E. Ashtor, L'administration urbaine en Syrie médiévale, *Revista degli Studi Orientali*, vol.36, 1956, pp. 73-128.
- (5) A. Havemann, *Ri'āsa und qaḍā*, Freiburg, 1975. なお、10-11世紀のイラクとイランについては、リーダーシップと忠誠心の問題を扱ったモッタヘデの興味深い研究がある。R.P. Mottahedeh, *Loyalty and Leadership in an Early Islamic Society*, Princeton, 1980.
- (6) U.A. Tadmuri, *Ta'rikh Ṭarābulus*, vol. 1, Ṭarābulus, 1984.
- (7) 第1部は「ヌサイリー教徒の反乱—ジャバラ・1318年2月—」『東洋学報』71-1・2, 1989年, 115-139頁。
- (8) *A'lāq*, II, 165. ハーヴェマンは, *Kāmil*, X, 60 の記事によって, イブン・アビー・アキールの独立を462年としているが (Havemann, *Ri'āsa*, S. 106), *Kāmil* の記事は462年にはこの人物がすでにスールを支配していたことを述べるだけである。
- (9) *Ibn al-Qalānisī*, 197. イブン・アビー・アキールによる商船の所有については, S.D. Goitein, *Letters of Medieval Jewish Traders*, Princeton, 1973, p. 158; id., *A Mediterranean Society*, vol. 1, Berkeley and Los Angeles, 1967, p. 296 を参照。
- (10) Havemann, *Ri'āsa*, S.107; P. M. Holt, *The Age of the Crusades*, London, 1986, pp. 70-71; *The Encyclopaedia of Islam*, new edition (以下, *E.I.n* と略記), s.v. 'Ammār.
- (11) *Mir'āt (Ibn al-Qalānisī)*, Leiden ed., n.1; *Kāmil*, X, 60, 71; *Yāqū t*, I, 105.
- (12) *Mir'āt*, Ankara, 133.
- (13) U.A. Tadmuri, *Ta'rikh Ṭarābulus*, p. 337f. なおアンマル家については, *Ibn al-Ṣayrafī*, 33-34; *Kāmil*, X, 71. cf. Holt, *The Age of the Crusades*, p. 71; M.D. Yusuf, *Economic Survey of Syria during the Tenth and Eleventh Centuries*, Berlin, 1985, pp. 115, 138.

- (14) *A'lāq*, II, 107. cf. *Ibn al-Qalānisi*, 262. Jirāb al-Dawla は本名を Aḥmad b. Muḥammad といい、カリフ・ムクタディル（在位908-932）時代の文人であった。C.Brockelmann, *Geschichte der Arabischen Literatur*, S.I, Leiden, 1937, S.599; Tadmuri, *Ta'riḫ Ṭarābulus*, p. 356.
- (15) Tadmuri, *Ta'riḫ Ṭarābulus*, p. 356.
- (16) *Kāmil*, X, 71; *Abū al-Fidā'*, II, 188; *Zubda al-Ḥalab*, II, 35; *A'lāq*, II, 108. Yāqūt は、アミーヌ・アッダウラの甥をジャラル・アッディーンとしているが（*Yāqūt*, II, 105）、これは明らかな誤りである。またタドムリーは、ジャラル・アルムルクとアブー・アルカタールをともにアミーヌ・アッダウラの兄弟としているが（Tadmuri, *Ta'riḫ Ṭarābulus*, p. 359）、Ibn al-Athir によれば、ジャラル・アルムルクのイスマは 'Ali b. Muḥammad b. 'Ammār であり、アミーヌ・アッダウラの甥に当たる（*Kāmil*, X, 71）。なおジャラル・アルムルクについては、M. G. Wiet, *Une inscription d'un prince de Tripoli de la dynastie des Banu 'Ammar, Mémorial Henri Basset II*, Paris, 1928, pp. 279-284 を参照。
- (17) *Kāmil*, X, 71. cf. *A'lāq*, II, 108.
- (18) *Ibn al-Qalānisi*, 182.
- (19) Philaretos は、アラビア語史料では、al-Firdūs あるいは al-Filārdūs と表記される（*Kāmil*, X, 138, 139, 413; *Zubda al-Ḥalab*, II, 86）。Philaretos については、A.A.Vasiliev, *Byzance et les Arabes*, Tome III, Bruxelles, 1935, pp. 122-123, 143-144を参照。なお、タドムリーはこの事件を469年のこととしているが（*Ta'riḫ Ṭarābulus*, p. 364）、典拠は示されていない。
- (20) *Mir'ūt*, Ankara, 208.
- (21) Cl.Cahen, *Mouvements populaires et autonomisme urbain dans L'Asie musulmane du moyen age*, I, *Arabica*, vol.5, 1958, pp. 225-250; Ashtor, *L'administration*, pp. 118-121; Havemann, *Ri'āsa*, SS. 89-104. 大川原香子「ヒジュラ5～6世紀のアレppoにおける都市自治について―特にライース職の役割を通して―」『寧楽史苑』29, 1984年, 26-49頁。
- (22) T. Sato, *The Syrian Coastal Town of Jabala*, Tokyo, 1988, pp. 38-41.
- (23) *Kāmil*, X, 310. Maṣṣūr の息子 Ibn Ṣulayḥa については、*Yāqūt* には Ibn Dālī'a とあり（II, 105）、*Siyar* には Ibn Ṣulay'a とあるが（XIX, 298）、ここでは同時代史料にしたがって Ibn Ṣulayḥa の呼称で統一する。
- (24) *Siyar* によれば、イブン・スライハは騎士道（furūsiya）を好んだとある（XIX, 298）。
- (25) *Kāmil*, X, 310; *Yāqūt*, II, 105.
- (26) *Kāmil*, X, 310.
- (27) ハーヴェマンはイブン・スライハの反乱を494年のこととしているが（Havemann, *Ri'āsa*, SS. 107-108）、反乱は明らかに十字軍によるジャバラ包囲前のことである

- (*Kāmil*, X, 310)。
- (28) *Kāmil*, X, 310. Godfroy of Lorraine と Robert of Flanders による第1回目のジャバラ包囲は、492 (1099) 年のはじめに行われた (M. W. Baldwin ed., *A History of the Crusades*, vol. 1, Madison, 1969, pp. 328–329; Sato, *The Syrian Coastal Town of Jabala*, p. 43)。
- (29) 'Aẓīmī, 360; A'lāq, II, 108. タドムリーは十字軍のジャバラ包囲をジャラル・アルムルクの没後としているが、実際の順序は逆である (Tadmuri, *Ta'rīkh Tarābulus*, p. 375)。
- (30) *Kāmil*, X, 310.
- (31) *Kāmil*, X, 311; *Siyar*, XIX, 299.
- (32) *Ibn al-Qalānīsī*, 226.
- (33) *Kāmil*, X, 311; *Siyar*, XIX, 299; *Bustān*, 115; *Abū al-Fidā'*, II, 213; 'Aẓīmī, 361. イブン・スライハは部下 (aṣḥāb) や近従 (asbāb) を伴い、家畜 (kurā), 駄獣 (dawābb), 財産 (māl) を持ってジャバラを脱出し、ダマスクスからバグダードに向かったが、スルタン・バルキヤールクによってすべての財産を没収された (*Ibn al-Qalānīsī*, 226; *Kāmil*, X, 307–308, 311–312; *Siyar*, XIX, 299; *Muntazam*, IX, 124)。
- (34) *Ibn al-Qalānīsī*, 226; *Kāmil*, X, 312; *Abū al-Fidā'*, II, 213.
- (35) *Kāmil*, X, 312.
- (36) *Tahdhīb*, IV, 356–357.
- (37) *Mir'āt*, VIII, 13.
- (38) *Ibn al-Qalānīsī*, 257–258; *Kāmil*, X, 452–453; A'lāq, II, 110–111. この反乱の主体については、シャムス・アルムルクがエジプトに対する忠誠のしるし (shi'ār) を明らかにしたとする史料 (*Ibn al-Qalānīsī*, 257; *Kāmil*, X, 452) と、トリボリの住民がエジプトへの忠誠を宣したとする史料 (A'lāq, II, 109) とに分かれているが、反乱に町の住民の意向が反映していたことは確かであろう。cf. Tadmuri, *Ta'rīkh Tarābulus*, p. 433.
- (39) *Kāmil*, X, 452; A'lāq, II, 111; *Ibn al-Furāt*, VIII, 78.
- (40) *Ibn al-Qalānīsī*, 262; A'lāq, II, 111; *Mir'āt*, VIII, 27; *Kāmil*, X, 475; *Bughya*, 158–159.
- (41) *Mir'āt*, VIII, 27–28; *Usāma*, 96; *Bustān*, 116; 'Aẓīmī, 370. なお *Kāmil* (X, 476) と *Bughya* (158–159) には、503年ズー・アルヒッジャ月ファフル・アルムルクのいるジュバイルが陥落したとあるが、明らかに502年ジャバラの誤りである。
- (42) B.Z. Kedar, *The Subjected Muslims of the Frankish Levant*, J.M. Powell ed., *Muslims under Latin Rule, 1100–1300*, Princeton, 1990, pp. 135–174.
- (43) J. Prawer, *Social Classes in the Crusader States: the "Minorities"*, N. P. Zaccar and H.W. Hazard eds., *A History of the Crusades*, vol.5, Madison,

1985, p. 61.

- (44) *Kāmil*, XII, 7. See Cahen, *La Syrie du nord*, p.428; Kedar, *The Subjected Muslims*, pp. 141-142.
- (45) J. Riley-Smith, *The Survival in Latin Palestine of Muslim Administration*, P. M. Holt ed., *The Eastern Mediterranean Lands in the Period of the Crusades*, Warminster, 1977, p. 10. なおケダルも、十字軍支配以前のトリポリやジャバラのカーディーを引合いに出して、マンスールの事例を例外とすべきではないと述べている (Kedar, *The Subjected Muslims*, pp. 142-143)。
- (46) *al-Fatḥ al-Qussī*, 228.
- (47) *Kāmil*, XII, 7-8; *al-Fatḥ al-Qussī*, 233.
- (48) *al-Fatḥ al-Qussī*, 233.
- (49) *al-Fatḥ al-Qussī*, 233; *Kāmil*, XII, 8; *Nawādir*, 89-90; *Zubda al-Ḥalab*, III, 103; *Ibn Abī al-Hayjā'*, fol.188v; *Abū al-Fidā'*, III, 73; *Bustān*, 147; *Mufarrij*, II, 255-256, 258-259; *Bar Hebraeus*, 328; *A'lām*, 84-85, 87.
- (50) *Nawādir*, 89-90; *Kāmil*, XII, 9; *Zubda al-Ḥalab*, III, 103; *Ibn Abī al-Hayjā'*, fol.188v; *Abū al-Fidā'*, III, 73; *Bustān*, 147; *Mufarrij*, II, 256.
- (51) *Kāmil*, XII, 8-9; *Abū al-Fidā'*, III, 74.
- (52) *al-Fatḥ al-Qussī*, 234; *Mufarrij*, II, 259.
- (53) 例えば, *E. I. n.*, s. v. *Ḳāḍī*; R. Levy, *Social Structure of Islam*, Cambridge, 1962, p.339f.; I. M. Lapidus, *A History of Islamic Societies*, Cambridge, 1988, pp. 324-325を参照。

主 要 史 料

- Abū al-Fidā'*: Abū al-Fidā', *Mukhtaṣar fī Akhbār al-Bashar*, 4vols., al-Qāhira, 1325H.
- A'lām*: anon., *al-A'lām wal-Tabyīn fī Khurūj al-Firanj*, S. Zakkār ed., Dimashq, 1981.
- A'lāq*: Ibn Shaddād Abū 'Abd Allāh, *al-A'lāq al-Khaṭīra fī Dhikr Umarā' al-Shām wal-Jazīra*, vol.2, S.al-Dahhān ed., Dimashq, 1963.
- 'Aẓīmī*: Muḥammad al-'Aẓīmī, *Ta'rīkh Ḥalab*, I.Za'rūr ed., Dimashq, 1984.
- Bar Hebraeus*: Bar Hebraeus, *Chronography*, English tr. by E. A. Wallis Budge, London, 1932.
- Barq*: 'Imād al-Din al-Iṣfahānī, *Kitāb al-Barq al-Shāmī*, MS. Bodleian Library, Bruce 11, Marsh 425.
- Bughya*: Ibn al-'Adim, *Bughya al-Ṭalb fī Ta'rīkh Ḥalab*, Ali Sevim ed., Ankara, 1976.
- Bustān*: anon., *Une chronique Syrienne du VI^e/XII^e siècle: "Bustān Al-Jāmi"*,

- Cl.Cahen ed., *BEO.*, vols.7-8, 1937-38.
- al-Fatḥ al-Qussī*: 'Imād al-Dīn al-Iṣfahānī, *al-Fatḥ al-Qussī fī al-Fatḥ al-Qudsī*, M. Şubḥ ed., n.p., 1965.
- Ibn Abī al-Hayjā*: Ibn Abī al-Hayjā', *Ta'rīkh Ibn Abī al-Hayjā*', MS. Aḥmadiya, Tunis (Ma'had al-Makḥṭūṭāt al-'Arabiya, Ta'rīkh 945).
- Ibn al-Furāt*: Ibn al-Furāt, *Ta'rīkh al-Duwal wal-Mulūk*, vols. 7-9, Q. Zariq ed., Bayrūt, 1936-42.
- Ibn al-Qalānisi*: Ibn al-Qalānisi, *Ta'rīkh Dimashq*, S. Zakkār ed., Dimashq, 1983.
- Ibn al-Şayrafī*: Ibn al-Şayrafī, *al-Ishāra ilā man nāla al-Wizāra*, A.Mukhlis ed., al-Qāhira, 1924.
- Kāmil*: Ibn al-Athīr, *al-Kāmil fī al-Ta'rīkh*, C. J. Tornberg ed., 12 vols., Leiden, 1853; repr. Bayrūt, 1965-66.
- Māwardī*: al-Māwardī, *al-Aḥkām al-Sulṭāniya*, al-Qāhira, 1966.
- Mir'āt*: Sibṭ Ibn al-Jawzi, *Mir'āt al-Zamān fī Ta'rīkh al-A'yān*, vols. VIII-1,2, Hyderabad, 1951-52; Ankara, 1968.
- Mufarrij*: Ibn Wāṣil, *Mufarrij al-Kurūb fī Akhbār Banī Ayyūb*, vols.1-5, J.al-Shayyāl and H.M.Rabī' eds., al-Qāhira, 1953-77.
- Muntaẓam*: Ibn al-Jawzi, *al-Muntaẓam fī Ta'rīkh al-Mulūk wal-Umam*, vols. 5-10, Hyderabad, 1357-58H.
- Nāṣir Khusraw*: Nāṣir Khusraw, *Şafar Nāma*, Berlin, 1340H.
- Nawādir*: Ibn Shaddād Bahā' al-Dīn, *al-Nawādir al-Sulṭāniya*, J.al-Shayyāl ed., al-Qāhira, 1964.
- Rawḍatayn*: Abū Shāma, *Kitāb al-Rawḍatayn fī Akhbār al-Dawlatayn*, 2 vols., M.H. Aḥmad ed., al-Qāhira, 1956-62.
- Sanā al-Barq*: al-Bundārī, *Sanā al-Barq al-Shāmī*, F.al-Nabrāwī ed., al-Qāhira, 1979.
- Siyar*: al-Dhahabī, *Siyar A'lām al-Nablā*', 23 vols., Sh.al-Arnūt ed., Bayrūt, 1981-85.
- Tahdhīb*: Ibn Badrān, *Tahdhīb Ta'rīkh Ibn 'Asākir*, 6 vols., Dimashq, 1329-49H.
- Usāma*: Usāma b. Munqidh, *Kitāb al-I'tibār*, P.K.Hitti ed., Princeton, 1930.
- Yāqūt*: Yāqūt al-Ḥamawī, *Mu'jam al-Buldān*, 5 vols., Bayrūt, 1955-57.
- Zubda al-Ḥalab*: Ibn al-'Adīm, *Zubda al-Ḥalab min Ta'rīkh Ḥalab*, 3vols., S. al-Dahhān ed., Dimashq, 1951-68.